

北谷城



北谷城全景（東から・1990年代撮影）

北谷町教育委員会

はじめに

■北谷町の位置

北谷町は、沖縄本島中部の西海岸沿いの人口約 28,000 人、面積 13.93 k m²の町で県都那覇から約 16 k m と近い距離に位置している。北は嘉手納町、東は沖縄市と北中城村、南は宜野湾市に接し、西側は全域が東シナ海に面する。気温は亜熱帯性気候(年平均気温約 22℃、湿度 75%前後)で四季を通して温暖である。現在町域の約 52.9%は米軍基地が占めている。

本町の西海岸地域は、那覇市、浦添市、宜野湾市と連担する一大都市圏が形成され、物流、コンベンション及びレクリエーション等の都市機能が集積され、沖縄県の中核的なゾーンとして大きな展望をもつ開けた地域である。



■北谷城の概要

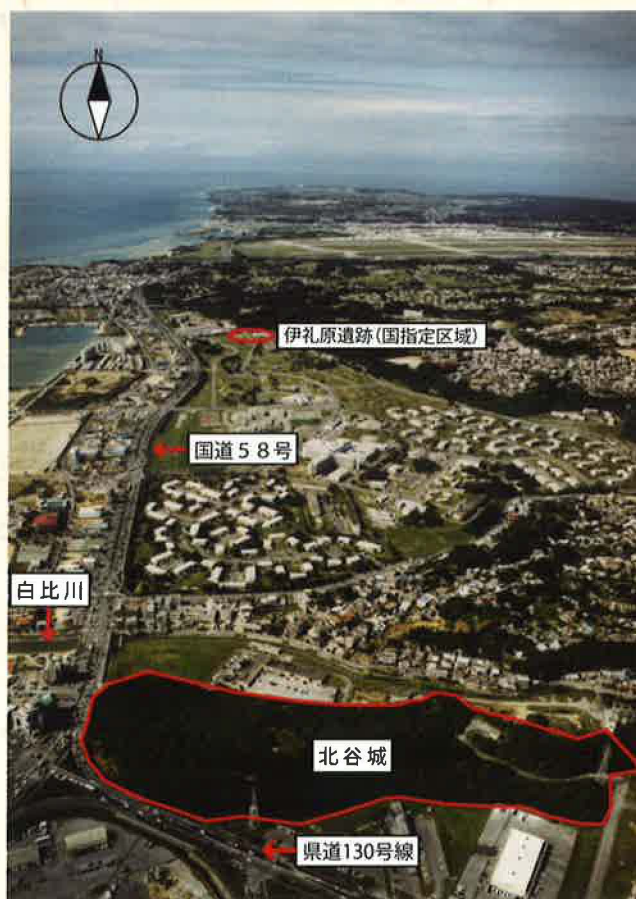
北谷城は町の南部に位置し、北に白比川が流れ、西に国道58号、南に県道130号線が通っており、東西約500m、南北30~100mの細長い丘陵の西側半分を利用している。中央部の最も高い標高は44.7mであり、西側に4つ並んだ平地をもつ連郭式のグスクである。城の規模としては、首里城跡、今帰仁城跡、糸数城跡、南山城跡に次ぐ大きさだと考えられる。城の南側には北谷・玉代勢・伝道集落が戦前まで存在していたが、現在は米軍基地内(キャンプ瑞慶覧)に接收されている。

北谷城は大川グスクとも呼ばれ、最初に金満按司* (かにまんあじ)、次に大川按司、谷茶按司 (たんちゃあじ) と三者それぞれ何度も権力の入れ替りがあつたと云われる。最後に、北谷按司で落ち着いたようである。『おもろそうし*』には、北谷城の城主について「きたたん*のてだ*」「きたたんの世のぬし」と譚つたわれているが、人物の特定には至ってない。

- *按 司 ……琉球諸島各地に現れた、グスク(城)を拠点とする支配者
- *おもろそうし…琉球最古の歌謡集
- *きたたん ……北谷 (ちゃたん)
- *て だ ……沖縄の方言で太陽を意味する。ここでは王のことをいう

■調査の成果

北谷城は昭和 58 年度から平成 13 年度までに計 16 回の調査が行われ、その結果から遺跡の保存状態が良好であり、歴史的にも重要な城であることが判明している。本町においては、北谷城の国史跡指定や城址公園として保存活用を目指し、今後も調査・研究を進めていく。



北谷城航空写真 (南側上空から)

調査風景



発掘調査



測量作業

出土遺物

北谷城からは多くの遺物が見つかりました。これらを調べる事で当時の生活を知ることができます。また、中国産陶磁器や中国銭、本土産陶器の出土から貿易が盛んだったと考えられます。



青磁盤



青磁皿



馬上杯



シーサーの元祖!?

↑ つまみ



じゆんきげんぼう せつじせん
淳熙元寶 折二銭



かゆうげんぼう
嘉祐元寶



しょうせいげんぼう
紹聖元寶



たいそうげんぼう
大宋元寶 折二銭

開元通寶：621年初鑄。唐時代
嘉裕元寶：1056年初鑄。北宋時代
紹聖元寶：1094年初鑄。北宋時代
淳熙元寶：淳熙16年（1189）鑄造。南宋時代
大宋元寶：1225年初鑄。南宋時代



青磁碗



青磁酒会壺

『首里城京の内展』
沖縄県立埋蔵文化財センター 2001



染付壺（図上復元）



ガラス製勾玉



鉄釘



くびれ平底土器出土状況



石斧出土状況



青銅製品
（鏝（かざり）金具?）

現在の北谷城とその周辺

北谷城跡

四連郭の石垣からなる城跡である。一の郭を頂上に四の郭まで高低差（段差）があり、それぞれ平場を設けている。機能としては、一の郭の一部に溜池があり、用途は不明。二の郭に舎殿が位置し、三の郭は祭祀などを行うための集会場、四の郭は軍事的要塞色の強い平場と考えられている。



北谷トンネル跡

1905年、伝道集落と桑江集の間にあった石灰岩の丘をくり抜いて県道（現国道58号）として開通。第二次大戦中の1944年、軍用路建設の際に破壊された。
右図：山川昌永作画「北谷トンネル風景」

池グスク跡

北谷城の出城的存在で、北からの攻めを監視していたと考えられている。



西御嶽（いりのうたき）

北谷城の西に13個の香炉が位置し、男子禁制である。12千支とそれをひとつに結ぶ火の神（ヒヌカン）のことであり、別名「十三香炉」とよばれる。



塩川（スーガー）

北谷城西側麓に位置する井戸（カー）。滑車を使って井戸水を汲み、溜池に運んだと考えられている。



グスク火の神（ヒヌカン）

西御嶽に入る前、先にここを拝んだといわれる。

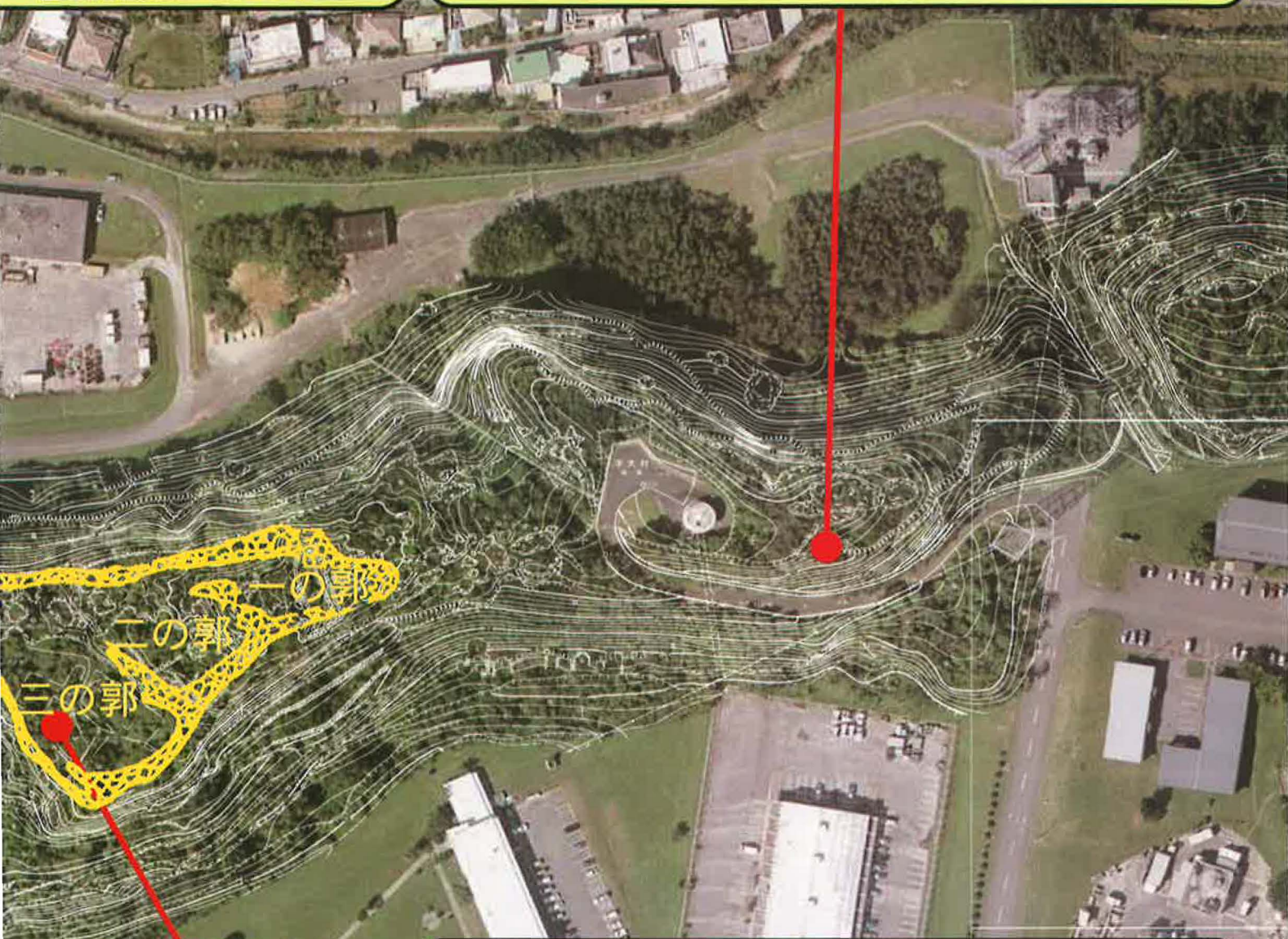




東り御嶽(あがりのうたき)

北谷城の東にイベ石が位置し、稲の収穫を感謝する行事「ウマチー」などを北谷ノロと北谷三箇ムラにより拝まれている神聖な場所。

現在はカガンガーとともに三の郭に移設されている。町指定文化財。



殿(とうん)

北谷城の三の郭に位置し、御嶽における祭祀を行う場所。町指定文化財。



【用語解説】

* 拝所(ほいしょ、うがんじゅ)

おがみどころ。土地の神、鎮守の神などをまつて拝む聖域であり、豊穰、大漁、雨乞い、無病息災などを祈願する場所である。

* 御嶽(うたき)

琉球古来の宗教(ニライカナイ、先祖崇拜など)における祭祀を行う場所であり、拝所であるが規模が大きく、ムラ全域を守護する聖域の総称。御嶽の最深部はイベとよばれ、神聖な石、樹木、香炉などがある。現在は政教分離が原則であるが、琉球王国当時は国教と政治が一体化し、祭政一致(政教一致)を行っていた。

* ノロ

琉球王国の頃、男が政治を行い、女が神事を司っていた。ノロは世襲制であり、各ムラの祭祀をまとめる王府に任命される神職(神女)である。住まいはノロ殿内(ドゥンチ)といい、ムラの祭祀の起点である。また、民間向けの祈祷師的な存在をユタといい、公的な祭祀を司るノロとは区別される。

* 北谷三箇ムラ

北谷城の城下町を形成する北谷集落・玉代勢集落・伝道集落。

北谷城関連年表

世紀	中国・日本	沖縄	北谷関連事項
8		753 鑑真を乗せた遣唐使船が阿児奈波島に漂着	
11	平安		1030～穀物の栽培始まる（小堀原遺跡）
12	1087 泉州に市舶司が設置される	1187 舜天即位。中山王となる	
	1192 源頼朝 征夷大將軍	1200 この頃五穀実らず大飢饉。疫病流行。人民の半数死亡	グスク土器が使われる。木棺墓が作られる（後兼久原遺跡）
13	鎌倉	1260 英祖王即位	鉄器の生産が始まり、鉄器が普及する。牛馬が飼われる。
	1277 宋代木造船泉州湾で沈没	1261 この頃英祖、浦添ようどれを造築	米・麦などの栽培農耕が本格化する（後兼久原遺跡）
	1338 室町幕府開く	1291 フビライ・カン瓏求を討つが失敗	
	1368 明建国	1296 元再び瓏求を討つが失敗。130人余を捕虜として連れ帰る	米・麦などの栽培農耕が本格化する（後兼久原遺跡）
	1371 海禁政策はじまる	1314 この頃から三山対立	掘立柱住居・高床式倉庫が作られる（後兼久原遺跡）
14		1372 中山王・察度初めて明に入貢	群雄割拠となり北谷城が築かれる
	1403 泉州に市舶司が再設される	1380 山南王・承察度初めて明に入貢	中国産の陶磁器がもたらされる
	1405 泉州に来遠駅が設けられる 鄭和の大航海始まる	1385 明の太祖、中山・山南王に海船を与える	金満按司
		1389 中山王、宗玉之を高麗に遣わす。高麗報聘使琉球に派遣	大川按司
		1392 中山王・山南王、国子監に初めて留学生を送る	谷茶按司
		1404 初めての冊封使・時中、来琉（中山・武寧、山南・汪応祖の冊封）	大川系按司
		1407 中山・思紹の冊封	
		1415 山南・他魯毎の冊封使・陳季芳、来琉	
		1421 バレンパンとの交易始まる	
		1424 下天紀廟が創建される	
		1425 尚巴志王の冊封使・柴山、来琉	
		1429 この頃尚巴志三山統一、第一尚氏王統始まる	
		1430 ジャワに使者を送る	
		1443 尚忠王の冊封使・余仲、来琉	
		1447 尚思達王の冊封使・陳傳、来琉	「おもろさうし」巻15-54 No.1105 きたたんに おわる / うらの世の主
		1452 尚金福王の冊封使来琉	
		1456 尚泰久王の冊封使来琉	
		1458 万国津梁の鐘を鋳造	「おもろさうし」巻15-58 No.1109 きたたんの世のぬし
		1463 尚徳王の冊封使・潘栄、来琉。マラッカに使者を送る	おさはつるき さしよわちへ （おさは剣差し給いて）
		1469 金丸即位。第二尚氏王統始まる	さしやり ふさいよわちへ （差し遣り榮え給いて）
		1472 尚円王の冊封使・官栄、来琉。二年一貢が命ぜられる。	
		1479 尚真王の冊封使・董嬰、来琉	
		1490 バタニ（タイ国）との交易始まる	
		1500 オヤケアカハチの乱。糸芭蕉が織物に利用される	
		1531 『おもろさうし』第1巻を編集	1526：北谷秀辰を平等大屋に任命
		1534 尚清王の冊封使・陳侃、来琉	1562：北谷間切山内頭頭に山内昌倫を任命
		1562 尚元王の冊封使・郭汝霖、来琉	1566：北谷朝里を北谷間切総頭頭に任命
		1570 東南アジア貿易の廃止	1572：北谷間切山内頭頭に山内昌親を任命
		1579 尚永王の冊封使・蕭崇業、来琉	1577：「きたたんおきてへの知行領賜の辞令書」発給
		1605 野国総管が甘露をもたらす	1586：北谷間切屋良地頭に屋良秀清を任命
		1606 尚寧王の冊封使・夏子蘭、来琉	1500年代末：北谷間切桑江地頭に桑江正次を任命
		1609 薩摩の琉球侵攻	琉球侵攻の守備隊として佐敷興道が北谷城に配置される
		1613 薩摩進貢を理由に十年一貢と言われる	
		1622 五年一貢を許される	
		1633 尚豊王の冊封使・杜三策、来琉	「球陽」早魁時に普天間邑後河から北谷郡邑 まで処々に堤を築き、水をためて用水とした
		1634 江戸上り慶賀使・謝恩使が始まる 二年一貢が許される	1649：「絵図郷村町」北谷・桑江・平安山・砂辺
		1663 尚質王の冊封使・張学礼、来琉	1652：北谷長老没、北谷親方（北谷朝暢）三司官就任
		1683 尚貞王の冊封使・汪楫、来琉	
		1719 尚敬王の冊封使・海宝来琉。初めて組踊を上演	1689：北谷王子（北谷朝愛）国相（摂政）就任
		1728 蔡温、三司官となる	1696：玉代勢村～北谷村間の虹（石橋）普請
		1756 尚穆王の冊封使・全魁、来琉	1722：北谷朝騎国相就任
		1798 官生騒動	1760：不作が続く身売り者170人余
		1800 尚温王の冊封使・趙文楷、来琉	
		1807 冊封費用のため薩摩から古銀800貫目を借用	
		1808 尚灝王の冊封使・斉範、来琉	1820：佐阿天川（宜野湾との境）に石橋新造
		1816 イギリス海軍のアルセスト・ライラ号来琉	1821：白比川の池城橋を石橋に改造
		1830 道光十年進貢表文	1840：北谷沖に英船インディアン・オーク号が座礁
		1838 尚青王の冊封使・林鴻年、来琉	
		1853 ベリーのアメリカ艦隊来琉	1851：熱病流行。本島全土で死者8,224人
		1854 琉米修好条約に調印	
		1862 薩摩が琉球通宝を鋳造	
		1866 最後の冊封使・趙新来琉	
	明治	1879 琉球処分	1879：沖縄県所管
			1882：間切学校（後の北谷尋常小学校）設置
			1896：中頭郡所屬
			1900：土族人口比率は間切中最高
		1908 間切制が廃止され、「沖縄県及び島嶼町村制」が施行	1908：北谷村成立
		1912 衆議院議員選挙法改正により沖縄県に同法を適用	1913：「中頭郡誌」生活状態は中位、貧富の差は甚大
			1922：県営鉄道嘉手納線「北谷駅」
		1944 那覇大空襲	1945：米軍上陸
		1945 沖縄戦により全島がアメリカ軍の占領下となる	
		1972 沖縄県の日本本土復帰。琉球政府の発足	
		1973 沖縄特別国体が開催	
		1975 沖縄国際海洋博覧会が開催	
	昭和		1980：北谷町施行
20	1912 中華民国建国・大正天皇即位		
	1926 昭和天皇即位		
	1949 中華人民共和国建国		

〔出展〕北谷町史 第1巻 附録 北谷町史編集事務局 2005

沖縄大百科事典 全巻 沖縄タイムス社 1983

角川日本地名大辞典 47 沖縄県 角川書店 1994

浦添市美術館企画展『海のシルクロードから琉球王国へ』配布資料 2005

「小堀原遺跡」北谷町文化財調査報告書 第34集 2012

グスク時代前夜（12世紀ごろ）

琉球史において、グスク時代は約12世紀から16世紀頃といわれています。グスク時代前夜とは、12世紀頃（平安時代後期）のことで、その頃まで狩猟（漁労）・採集が中心でしたが、穀物などを栽培する農耕が盛んになります。農耕社会への移行は沖縄の歴史上大きな分岐点で、人間が共同で農耕を行い、管理していく組織（ムラ）の成立は、貧富の差を生み、支配者（按司）を登場させました。農耕の発生を機に、農業土木技術、琉球王国の成立、海外貿易など急速な文明の発展にもつながります。



12世紀頃の北谷城
(想像図：中村憲作画)

北谷町においても、その頃より平坦地や丘陵地に人々が定住し始め、農耕を取り入れたムラが形成されます。北谷城でも按司（あじ）の居城となる以前の掘立柱跡が確認されました。また、九州との交易品が出土しました。



夜光貝製貝匙



くびれ平底土器



舎殿下に残る古い建物の柱跡



中国産白磁



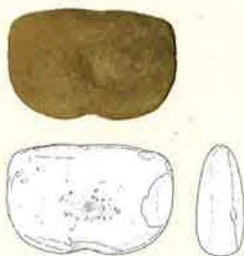
カムイヤキ（徳之島産）



開元通寶

(621年（唐代）初鑄)

およそ千年前から夜光貝等の対価として、沖縄にもたらされた。工芸品の材料と思われる



くがに石

木の実などを押し潰す

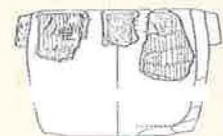
《当時の食べ物》



アラスジケマンガイ
(白比川河口では大量に採集できる)



イネ オオムギ
コムギ アワ キビ?

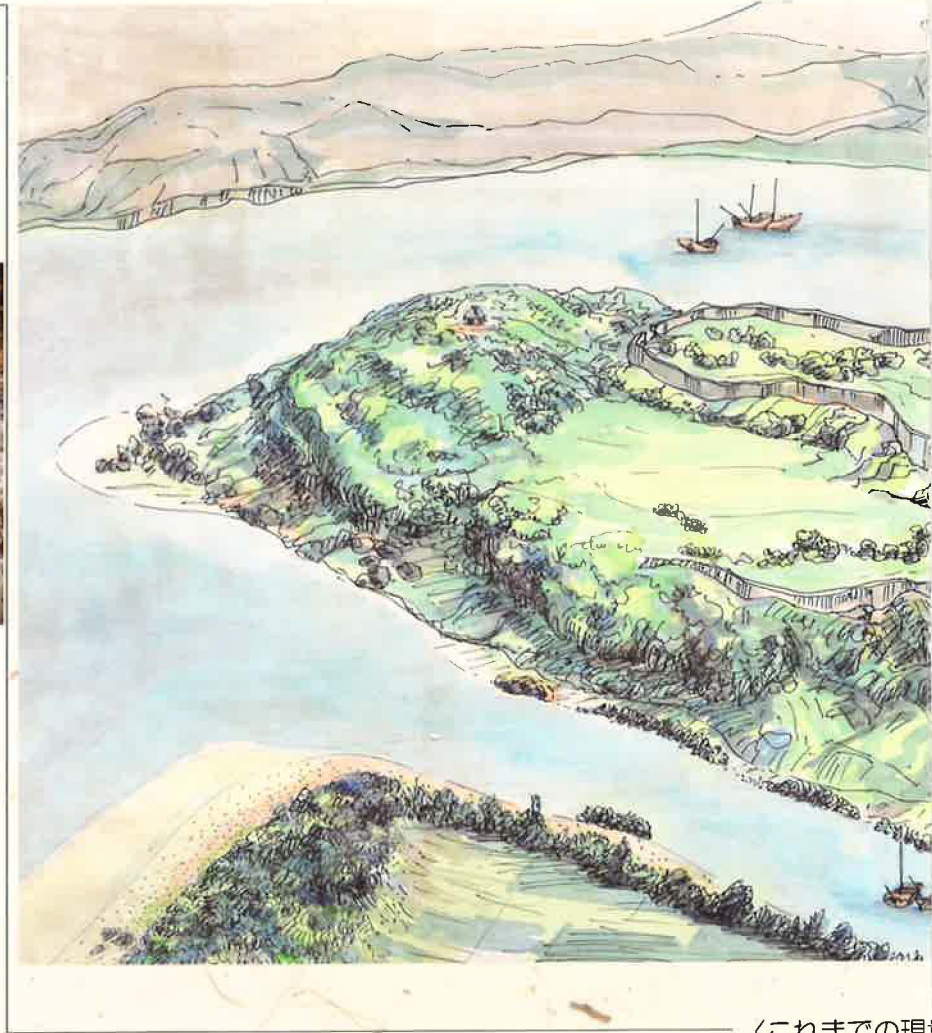


滑石製石鍋

滑石は長崎県でしか採れず保温性に優れている。グスク時代には形を真似た土器や滑石の粉を混ぜたり、塗ったりした土器が作られる

グスク時代（14・15世紀ごろ）

13世紀から14世紀にかけて、本島各地において按司（あじ）の台頭、城の築城、そして抗争が繰り返されました。その結果、北山（本島北部地区）、中山（那覇・中部地区）、南山（南部地区）のそれぞれの地域を支配した按司が出現しました。三山時代です。また15世紀に入ると佐敷按司である尚巴志による三山統一がなされ、琉球王国450年の礎が誕生します。その後琉球王府による中央集権化の確立、明（現中国）との冊封関係（主従関係）を強化し、中国からいろいろな技術



〈これまでの現



舎殿の配石遺構（二の郭）



ヒンパン状の石垣（二の郭）



発掘状況（二の郭）



二の郭を取り囲む

を学びます。中でも造船、航海技術を習得した事から、明を中心に日本、朝鮮半島、東南アジアまで活発な貿易を行い、富を築いていきます。この頃が琉球王国の黄金期だったと考えられます。

その頃の北谷町においても、北谷城をめぐり、最初に金満按司、次に大川按司や谷茶按司で各々の興亡*があったといわれ、最終的に北谷按司に落ち着いたと考えられています。

*興亡：^{おこ}興り栄える事と滅びる事



14～15世紀頃の北谷城
(想像図：中村愿作画)

〈グスク時代に使われていた道具〉



グスク土器



青磁皿



青磁碗



擂鉢(すりばち)



染付碗



砥石(といし)



刀子(とうす)



ブラヤックワン



土錘(どすい)



地踏査や発掘調査により、発見された石垣の一部や舎殿跡)



石積み



今も残る石垣(四の郭)



グスク周辺を取り囲む石積み

近世琉球（17・18世紀ごろ）

1609年、薩摩藩による琉球征伐が行われ、琉球王国は薩摩藩の従属国となりました（薩摩侵攻）。その後の琉球は、薩摩による重税等に苦しみながら、新しい王国づくりを進めていきます。しかしながら、中国との関係も続き、痩せた土地でも育つ甘藷（唐芋（後の薩摩芋））を持ち帰って普及させた事は、台風や日照り等の災害の度に飢えに苦しむ農民の食糧事情を大きく変化させました。この頃の沖縄は甘藷やサトウキビの普及、琉球漆器・陶器など独自の産業が発展していきます。また、三線、エイサー、組踊りなど伝統的な沖縄民俗芸能の発祥もこの頃と考えられています。

琉球王府の中央集権化に伴い、現在の町や村にあたる行政区分の単位として「間切」が置かれま



庶民の様子 比嘉峯山「風俗図」
沖縄県立博物館・美術館所蔵

〈語り伝えられた人たち〉

ちやたん

■ 北谷モーシ

恩納ナビ、吉屋チルーと合わせて琉球三大歌人と呼ばれる。『琉歌百控』（りゅうかひゃっこう・1795年作。最も古い琉歌集）に「北谷真牛金が、歌声打ち出せば、中辺飛ぶ鳥や、淀で聞きよさ」とまで謡われた、絶世の美声の持ち主といわれる伝説的な女性です。北谷城北側崖の中腹に葬られていると伝えられています。



ちやたんちようろう

■ 北谷長老 [?~1652]

現在の玉代勢に生まれ日本で修行をして、沖縄に初めて臨済宗妙心寺派をもたらしました。没後長老山に葬られましたが、墓参りをすると病が癒えたり、害虫駆除などの霊験があるといわれ、北谷・玉代勢・伝道では豊年を祈るようになりました。

長老祭（旧9月15日）は現在も続いています。



現在も続く長老祭



祭祀の際には馬に乗ったノロが通ったといわ

城の三の郭にある門

した。北谷間切は古く16世紀代から続き、当時は現在の嘉手納町も含む大きな間切でした。王府により番所（現在の役所）が設置され村々の耕作状況や年貢収納等の監督・指導を行いました。また、北谷間切には沖縄の三大美田（現国頭村奥間、名護市羽地、北谷町北谷）と言われた、豊かな田んぼである北谷ターブックワがありました。

この頃の北谷城には按司の居城としての機能は無く、城内にある拝所で王府より任命された北谷ノロ（神女）が集落の年中行事などの祭祀を執り行いました。北谷ノロは現在も受け継がれています。

17^{世紀}～18世紀頃の北谷城

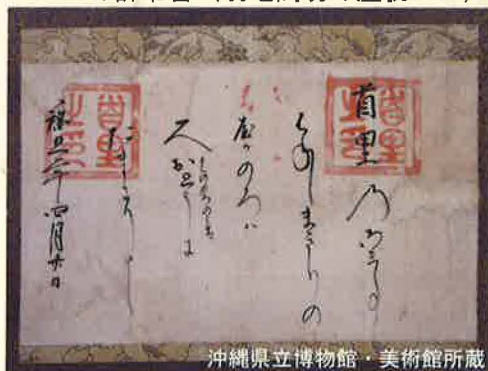
（想像図：中村憲作画）



祭祀を執り行う北谷ノロ（1998年）

《参考資料》

ノロの辞令書（羽地間切の屋我ノロ）



沖縄県立博物館・美術館所蔵

印

天啓五年四月廿日

一人おとうに
たまわり申候

屋かのろハ
もとのろのうまか

印

首里の御ミ事
はねしまきりの

〈読み下し文〉



北谷城内に位置する御嶽

（殿は北谷ムラだけのものでなく、ミムラ（北谷・玉代勢・伝道）のものだった。ミムラのニーサーガシラ達は両ウマチーの裏方として役割分担をした）



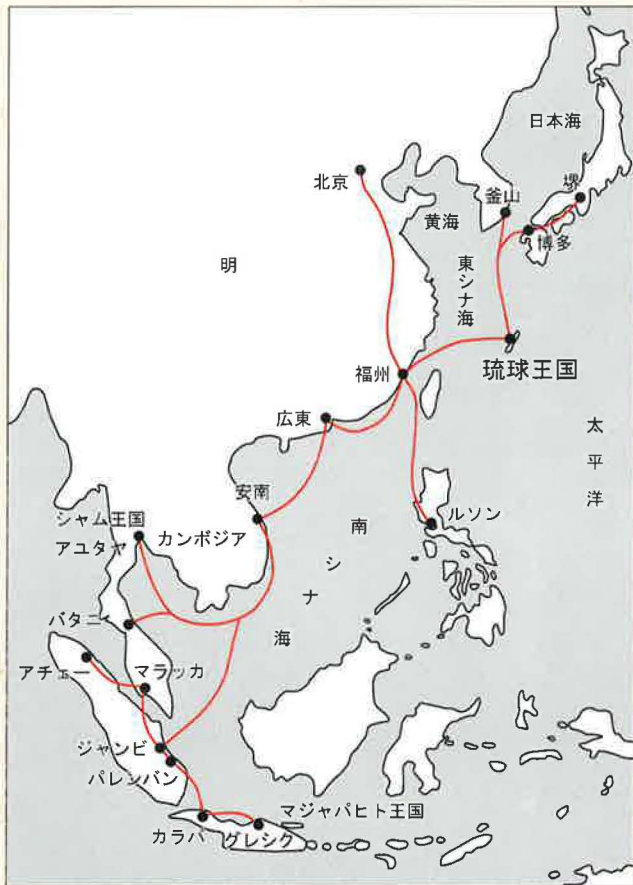
東恩納ノロの勾玉

『東恩納ノロ殿内遺跡』
うるま市文化財調査報告書第15集 2011

琉球王国の交易ルート

琉球王国は、日本と明（中国）の間に位置し、その間を取り持つ中継貿易を行うことにより、両国の影響を受け独自の文化を築いていきました。東シナ海の要地に位置する地の利を活かして、交易範囲を北は朝鮮半島、南はフィリピン・インドネシア等東南アジアまで広げ、そのルートを確保していました。その背景には、中国（明、清時代）が海賊の禁圧や密貿易の防止を目的とした民間の海上利用を規制する海禁政策があります。中国との間に冊封関係（主従関係）を結んだ琉球王国は、正式な海運業を営むことができたので、東シナ海一帯に交易ルートを広げることができました。

中国人の海外渡航が禁止された状況下で中国商品（陶磁器等）を輸出し、日本・朝鮮・東南アジア諸国で特産品（香料、胡椒、蘇木（漢方薬）等）を入手して、自前の商品を加えた後、中国へ輸出しました。各国との往来に使用されたのが進貢船でした。県内各地のグスクから出土する中国産陶磁器は生活用品としてだけではなく、南方諸国との交易の礼品として輸入・輸出された事が、「^{れきだいほうあん}歴代宝案」等からうかがえます。



琉球王国時代の交易ルート（14C末～16C）



掃鉢（備前（岡山県）産）



天目茶碗（中国産）



褐釉陶器（中国産）



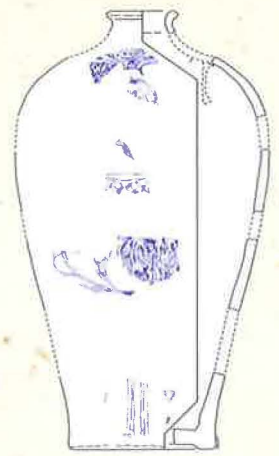
蓋付小壺（タイ産）



青磁碗や皿（中国産）



華南三彩（中国産）



染付梅瓶（中国産）
（図上復元）

沖縄県内の主なグスク

日本本土でいう城（しろ）と琉球諸島でいう城（グスク）は少し意味合いが異なります。県内において城とは、①按司の居城。②集落（ムラ）の砦。③御嶽（聖域）における祭祀場。など諸説あります。①の場合、漢字の“城”②・③の場合、カタカナで“グスク”と呼ばれていることがあり、時代、背景によって異なります。

現在、沖縄県内には300近いグスク（城）と呼ばれる遺跡が残っています。石積み等による縄張り空間を持ち、その中に御嶽と呼ばれる聖域を有する事が多いのが特徴です。グスクは12世紀前後から14世紀にかけて各地で盛んに造られました。地域を支配する豪族の拠点としては北山（今帰仁城跡）中山（浦添城跡・首里城跡）南山（島尻大里グスク・島添大里城跡）が代表的です。

沖縄県内のグスクには世界遺産として登録又は国史跡として指定されているものが多数存在します。北谷城についても、今後国指定史跡として仲間入りできるよう調査研究を進めていきます。

	名称	所在地	国史跡	世界遺産
1	根謝銘グスク	大宜味村		
2	今帰仁城跡附シイナ城跡	今帰仁村	○	○
3	陣グスク	本部町		
4	山田城跡	恩納村	○	
5	伊波城跡	うるま市		
6	勝連城跡	うるま市	○	○
7	安慶名城跡	うるま市	○	
8	座喜味城跡	読谷村	○	○
9	北谷城	北谷町		
10	中城城跡	中城村	○	○
11	浦添城跡	浦添市	○	
12	三重城跡	那覇市		
13	首里城跡	那覇市	○	○
14	南山城跡	糸満市		
15	米須グスク	糸満市		
16	具志川城跡	糸満市	○	
17	佐敷城跡	南城市	○	
18	島添大里城跡	南城市	○	
19	玉城城跡	南城市	○	
20	糸数城跡	南城市	○	
21	知念城跡	南城市	○	
22	宇江城城跡	久米島町	○	
23	具志川城跡	久米島町	○	
24	下田原城跡	竹富町	○	

〈沖縄県内の主なグスク一覧〉



おわりに

■北谷城の重要性

北谷城は、東西に伸びる独立丘陵上に石垣が西側に向かって、四つの郭（くるわ）から成る連郭式の大規模なグスクである。その規模から地方としては、かなり有力なグスクであった可能性が高い。

昭和 58 年度より平成 13 年度までの間に 16 回の調査が行われ、その結果、石垣が築かれる前、12 世紀以前と考えられる柱穴が確認されたことから集落が形成されていたと思われる。その後、有力按司の台頭により北谷・玉代勢・伝道ムラを城下町にし、居城にしたと思われる。北谷城の最初の按司は金満（かにまん）按司でその後、大川按司にとって代わる。しかし、大川按司も谷茶按司にとって代わるものの、後に大川按司系統の按司に滅ぼされたとの言い伝えがある。これら按司の興亡はどれぐらいの期間であったか不明だが、石垣の構築は出土した中国産陶磁器より 14 世紀後半から 15 世紀中頃と考えられ、二の郭には舎殿跡も確認されている。そのころがグスクの最盛期と思われる。

しかしながら、第二尚氏の頃に北谷城は王府の中央集権化に伴い按司は首里に居住し、代わりに王府より有力者が北谷間切を拝領され統治される。それによって北谷城は廃城となる。その後、北谷城は北谷ノロによってムラなどの年中行事などの祭祀を執り行う祭場としての機能へ変わってゆく。このように、12 世紀以前の集落跡から有力按司による築城、その後の近世の祭祀場に至るまでの機能の変遷が追える貴重なグスクである。

■北谷城の保存活用

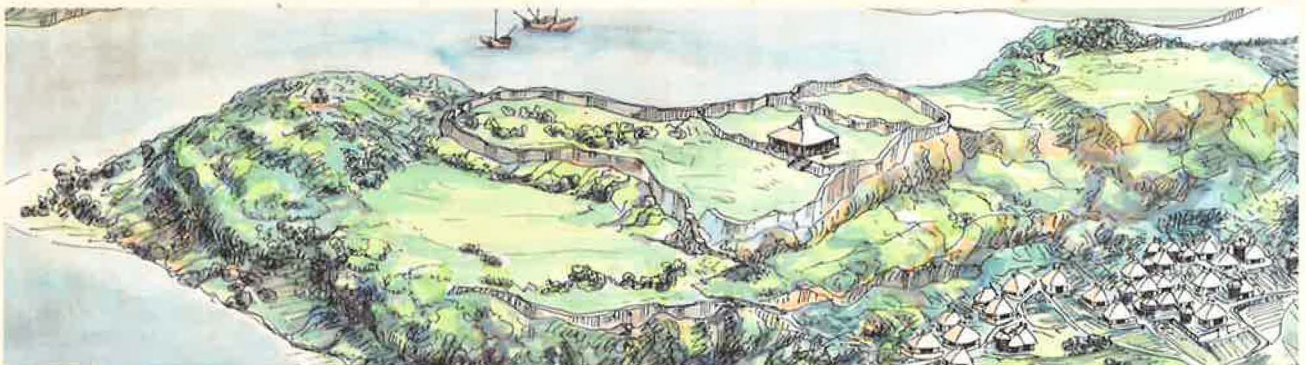
北谷城の位置する米軍基地の一部は平成31年度返還予定であり、現在、国史跡指定に向け取り組んでいるところである。指定後は石垣などの復元整備活用を行い、城跡公園として公開・活用を行っていく計画である。北谷城は国道58号に接し、その雄姿は北谷町のあらたなシンボルになると思われる。国指定史跡伊礼原遺跡及び町立博物館と歴史文化施設との連携を図り、観光資源及び郷土学習の生きた教材として整備していきたい。

〈参考文献〉『沖縄の歴史と文化』沖縄県教育委員会 2000

『北谷町の自然・歴史・文化』北谷町教育委員会 1996

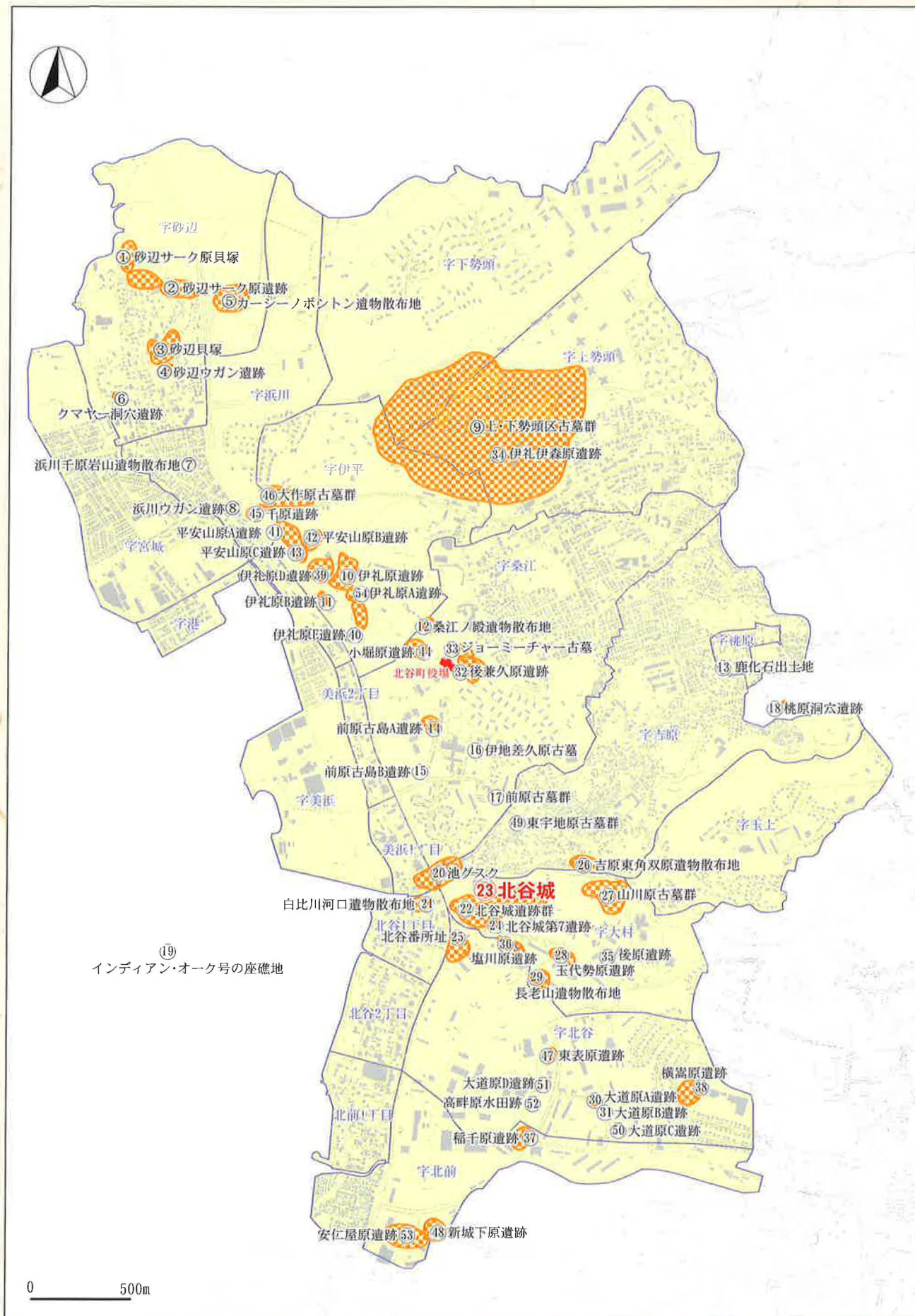
『沖縄県史 各論編 3 古琉球』財団法人沖縄県文化振興会史料編集室 2010

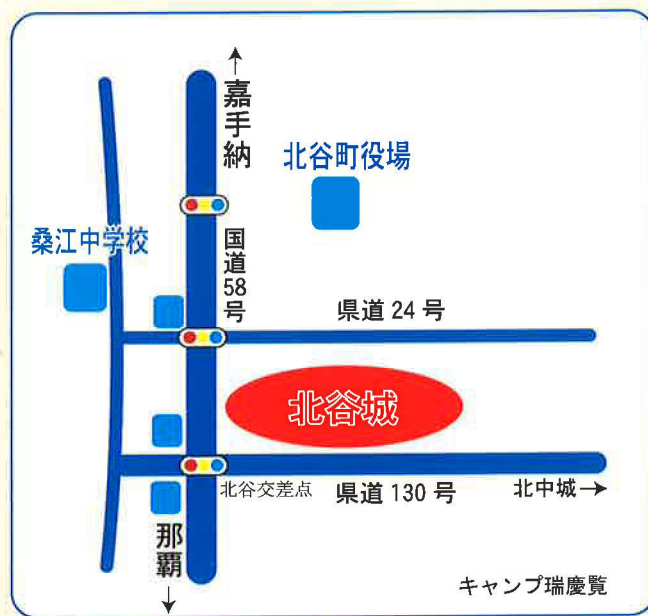
『首里城ハンドブック』首里城公園友の会 1998



北谷城復元想定図

北谷町域の遺跡分布図





北谷城

2015年度版

- 発行 / 北谷町教育委員会
〒904-0103 北谷町字桑江 226
TEL(098)-936-3159
- 印刷 / (有) 北谷印刷
〒904-0105 北谷町字吉原 790-31
TEL(098)-936-1068